第375号 昭和51年9月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日第三種郵便物認可

昭和51年（1976年）
9月号（No. 375）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）
定価一部 150円

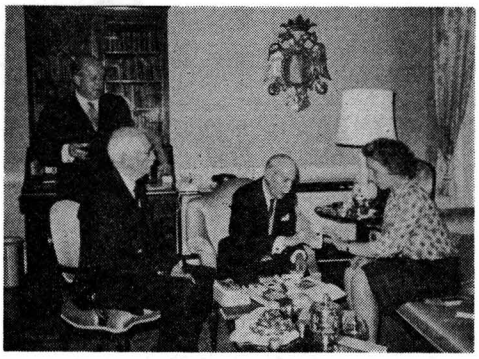
目　次

アルパイン・クラブ百年祭と
武田久吉博士の想い出
——日高大使の追悼会にあたり——
（西　春彦）……（1）
<追悼>
岳友日高信六郎君を偲んで
（大木　操）……（2）
日高信六郎氏を追悼する会……（3）
（織内信彦）
<会員通信・集会報告>
アメリカの小島烏水
（近藤信行）……（4）
パミール登山報告
パミール登山隊出発まで
（伊藤行人）……（5）
パミールの山麓から
（原　真）……（6）
会員章覚え書（望月達夫）……（7）
上高地での自然保護委員会
（武田満子）……（8）
苗場山記念山行（鈴木敏夫）……（11）
図書紹介……（5）
会員動向・お知らせなど……（12）
カット／谷アユ子

アルパインクラブ百年祭と武田久吉博士の想い出

——日高大使の追悼会にあたり——

西　春彦



サー・ジョン・ピルチャー英国大使邸の昼食会
左から大使，スコット氏，武田博士，レディ・スコット
（撮影／西　春彦）

つぎつぎに代のひとこまを荷いてし友だちは逝くみわかれあわれ

一カ月余にわたるヨーロッパ旅行から最近無事帰朝しましたが、旅の疲れで本日の会合に出席出来ず残念に存じます。旅行中、日高大使が逝かれ、更に沢田節蔵大使が逝かれ、平素親しく願った御両人の葬儀にも参列出来なかったのです。

本日、日高大使の追悼会で日本ネパール協会、日本山岳会のみなさんとお目にはかかれないが、両協会とも関係のあることを二、三お話し申上げることは有難いしあわせに存じます。

私のロンドン在任中（一九五五～五七）の二年半の間に次のようなことがありました。ご参考までに述べてみます。

㈠　一九五七年に英国のアルパイン・クラブ百年記念行事がおこなわれ、日本からマナスル登山の隊長槇有恒さんと松方三郎さんが見えられたが、この行事にはロンドンの外交団は招待されなかったので、私は大使公邸でリセプションを催したところ、英国側から八十二歳のロングスタッフ翁をはじめ登山界の古豪も相当数お見えになり、またこの際「マナスルに立つ」と題する英語版天然色フィルムの映写会をやりましたところ、大変に好評で、まことに愉快な日英親善の一夕を過すことが出来ました。

㈡　またあるとき、印度ダージリンから英国登山隊の一九五三年のエベレスト登頂に偉大な貢献をしたテンジン君が来英すると聞き、ぜひ会いたいとネパール大使に申込んでおいたところ、しばらくして大使から本日公邸に来るとの知らせで訪問し、元気な姿のテンジン君と会いました。また間もなく登山隊長のサー・ジョン・ハントが夫人とともに見えられました。いずれも他に会合の約束があった様子で、少時歓談の後、一同記念撮影をして別れました。帰国後、日高大使と会ったときこの話をしたらその写真を希望されたので、後で届けたところ、同君から山岳会の雑誌に掲載することにしたとお知らせがありました。

次に日本山岳会創設者の一人で尾瀬沼など高山植物の大家だった故武田久吉理学博士のことをお話します。

私が英国から帰国し、日英協会の理事長をしていた時代のことです。

武田さんは、幕末生麦事件の頃から明治時代日清戦争の頃までの有名な英国外交官で最後は駐日公使、それから北京駐在の英国公使となり、団匪事件の後始末として列国に対する賠償金の交渉にあたったサー・アーネスト・サトウ Sir Earnest Satow の御令息です。

一九六二年、生麦事件の百年記念事業を日英協会主催でおこなった際、丸善で日英関係資料展示会を開いたが、博士は、サトウが明治十年西南戦争勃発前の状況視察のため鹿児島に赴いたとき、現地苗代川に赴いて調査した薩摩焼の論文や、その他数篇の論文の英文印刷物を私に下され、秩父宮妃台覧のときには自分も出席するなど種種援助されました。また朝日講堂での記念講演会では私の求めに応じ「父アーネスト・サトウを語る」という題目で講演されました。博士が父君との関係を明らかにされたのはこれがはじめてであり、そのとき博士は八十二歳の高齢でした。その後、サー・ジョン・ピルチャー（Sir John Pircher）大使のとき、私から博士の父君はサー・

山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう

武田博士邸の庭園で。博士とレディ・スコット
（撮影／西　春彦）

アーネスト・サトウであり、母上は日本人であると告げたところ、それまで博士は英国大使館と関係がなかったらしく、大使は非常な興味を示され、ぜひいつか都合をつけて会食したいとのことでした。その後一年ぐらいして英国からレディ・スコットという婦人の植物学者が夫君と大使公邸に泊っておられたとき、大使は博士と私を招かれ、合計五人で午餐を共にしました。これで英国大使と武田博士がはじめて会見されたわけで、私はこの会合をカメラに収めました。

なお、このレディ・スコットは食後、ぜひ高山植物を植えてある博士邸の庭を見たいとのことだったが、冬枯れで見るものはないといったけれどもぜひにとの希望でひどい雨の中を博士と二人で靖国神社近くの富士見町の博士邸の庭に案内しました。そのときもカメラに収め、いずれも博士に送ったところ、写真の出来栄えに大満足の意を表され、またあの日の翌日には二人を訪問して種子や挿芽を進呈したと知らせてこられました。

武田博士は約三年前逝去されましたが、これについてみなさまにぜひお話し申上げたいことがあります。あるいはご承知の方もあるかとも思いますが、富士見町の博士邸は博士のお話では、幕末、旗本大名の邸だったらしく、しかもその後、明治から今日まで何の災害にもかからずに保存されていました。かつて東京都は記念保存物にしたい希望がありましたが、博士は記念物に指定されると来訪者が多く面倒だから辞退したということでした。ところが今度、相続税関係などで同邸は隣接の法政大学に売渡され、遺族は転居されたそうです。私はアーネスト・サトウの研究家萩原延寿君と相談し、同君から法政大学の中村総長に対し、この歴史的由緒ある博士邸を何とか保存して欲しいと申入れ、総長も趣旨は十分了解し、篤と考慮を約されましたが、そのまま存置は出来かねる、明治村に移す資金はないだろうかなどとのお話だったそうです。私はこのことを博士と関係のある両協会のみなさまにお知らせしてよくご考究御願い致したい次第でございます。なお萩原君は七月末、欧州旅行から帰国します。

（筆者は元駐英大使・霞関会評議委員会会長）

＊この文章は去る七月二十二日の日高信六郎氏追悼会に寄せられたもので、当日は蜂谷輝雄氏によって代読されました。松田雄一氏の仲介により西氏の補筆を得て収録しました。

日高信六郎氏追悼

岳友日高信六郎君を偲んで

大木　操

古い岳友日高信六郎君が、今年の六月十八日に亡くなられたことを、数日後の発表で初めて知って、あまりにも突然のことで私はただただ驚き、悲しみに咽ぶのみであった。

想えば日高君と初めて相識ったのは、もう六十数年も昔のことで、明治から改まったばかりの大正元年九月、君が一高の英法一年に入学してきた時からである。当時独法三年の私と同級で山登りの相棒だった守島伍郎君が、日高君と郷里を同じくし、福岡の修猷館中学の先輩という間柄であったので忽ち心易くなり、私らの山行きにはいつも仲間入りするようになってしまった。この頃、君は已に日本山岳会の会員であることを聞き知って、私らは驚いた記憶がある。

左下に掲げる写真は、大正元年の晩秋赤城山頂で撮ったものである。

赤城山といえば手近かなので、その頃よく出かけたものだが、ある美しい月夜の晩に急に思い立って、日高、守島両君と私の三人は朴歯の下駄穿きのままで、寮歌を高唱しながら、月光を頼りに山頂目掛けて夜通し頑張り、早暁猪谷の家へすき腹かかえて漸く辿り着いたという、乱暴だったが青春時代の想い出が、楽しく残っているのも懐かしい限りである。

また次ページの写真に示すように大正三年の秋には、私ら三人は甲斐駒、仙丈を志し、屏風小屋で一緒にゴロ寝したり、馬の背渡りでは守島君の動きで危い思いをしたり、仙丈岳の頂上では初秋ながら、時ならぬ吹雪に見舞われて大あわてしたりなどして、無事伊那の高遠まで抜け出た時は、全くやれやれであった。

これも遠い昔の想い出であるが、今以て妙にこの時のことが鮮烈に印象づけられているわけは、それは外でもない、この甲斐駒仙丈行こそが、私にとっては日本アルプス登山の終止符を打ったことになったという、何としても生涯忘れることの出来ない、記念すべき登山行になったからである。しかもこれが同時に、日高君と行を共にした山登りの最後ともなったという、まことに物悲しい追憶の種となっているからである。

大正二年の夏、私と守島君とでつくり上げた一高山岳会は、槍岳征服という大目的を完遂したけれ

右端のマント姿が日高信六郎君。前の鉢巻姿は元気な守島伍郎君。後ろの同級生は皆物故してしまった。

ど、そのままにして卒業してしまったので、後を受けた日高君らの委員が並々ならぬ努力をつづけ、遂に一高校友会の旅行部として公認させたその功績は、今に至るまで山仲間の語り草となっている。

その一高旅行部の足跡について、偶々日本山岳会から昭和四十九年三月十三日、山岳史懇談会の席で日高君、同期の中塚癸巳男君、私の三人で語り合ってくれということになった。久しぶりで仲良く肩を並べた三人は、思うがままに夫々の記憶を辿って、懐旧談に花を咲かせたのであったが、このルームでの日高君との顔合せが、何と永久のお別れの場になろうなどとは、全く夢にも思い及ばぬところであった。

その後今年の一月十七日のこと、私は日高君と電話で親しく話を交わし合った。それは私が暮から冒された流感で、死の一歩手前まで追い込まれた寝正月を過ごしたので、老齢のせいか妙に感傷的になり、同じ昇天するなら昔通りの日本山岳会の会員になって、大自然の懐に抱かれた気分で安らかに目を瞑りたいものだと、心の底から祈るようになった。回復を待って早速受話器を取り、日高君に率直に私の心境を伝えたのが、実にこの日なのである。

「それは大変結構なことだ、君の会員番号は欠番になっている筈だから、入会は簡単だよ、すぐに会の方へ取り次いで置くから、お大切に……」

まことに気さくで思いやりのある返事だった。そして二月九日には、早くも復活入会承認の通知が届いたので、翌日また電話して厚く礼を述べたところ

「それはよかった。藤島君にも君のことを話したら喜んでいたよ、いずれまたゆっくり話を」

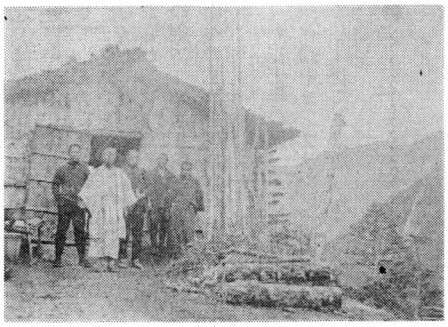
こういう挨拶で君の言葉は切れた。いずれまたとは言われたけれど、僅か半年も経たないうちに、親しく語り合う機会は永遠に断たれてしまった。虚しい限りである。

想い起せばその昔、私らが一高山岳会を企画した当時、日本山岳会創立者の一人である、高野鷹蔵氏の横浜のお宅に再三押しかけ、厚かましくも指導と協力をお願いすることが出来たのも、已に会員だった日高君の居たことが大いに手助けになった。また、時を隔てて今年の冬、私の日本山岳会再入会についても、真っ先に日高君の口添え依頼が頭に浮んだことは前述の通りである。

つまり、古い岳友日高信六郎君は私のために、二度までも日本山岳会との間の縁結び役を果してくれたわけで、まことに友情の厚かった仲人さんだったといえるのである。

こうした数々の想い出を胸に秘めながら、私は七月二十二日麻布の国際文化会館で行われた、故日高君の追悼会に参列した。穂高の岳沢を背景にして元気だった君の笑顔に接して、ほんとうに声を出して話しかけたいほどに懐かしかった。そしてまた、極めて寂しくもあった。無量の思いを篭めて霊前に花を捧げ、ひたすらに君の冥福を祈念したのであった。

（昭和五一・七・三〇記）



大正3年秋，甲斐駒屏風小屋前にて。
右から小屋番，強力，守島伍郎君，行者，日高信六郎君。

日高信六郎氏を追悼する会

撮影／川北　仁氏

五月二十九日入院、六月十八日八十四歳で他界された本会の第九代会長日高信六郎氏を追悼する会が七月二十二日国際文化会館で催された。日本山岳会と日本ネパール協会が世話役となって、それに旧一高旅行部、東大山の会、自然保護協会、ヒマラヤ技術協力会、外務省関係者等の有志が約一七〇名参会して盛会であった。

川喜田二郎氏が司会者として故人の略歴を紹介、次いで、日本ネパール協会の新しい会長、また本会の名誉会員でもある西堀栄三郎氏が主催者を代表して挨拶、続いて立った駐日ネパール大使ドクター・パント氏は、故人の日ネ両国間の交流親善に果たした功績を讃えた。

今西会長は、故人は八十四歳の長寿で逝くなられるときまで各方面で幅広い活躍をされた、われわれもこれにあやかりたいものである、と述べて来会者一同と共に献盃を行なった。

外務省の関係者からも外交官としての日高さんの憶い出などが交交述べられて盛会であった。岳沢の残雪を背景にした山旅姿の遺影は清そな白菊にふちどられ、在りし日の温容に接する感を深くしたが、この写真は名古屋在住の会員川北仁氏の提供によるものである。

日高さんは福岡県の修猷館中学時代に登山に興味をもちはじめ、明治四十一年十五歳で日本山岳会に入会された。会員番号は一四二番であった。入会の動機は『山岳』を書店でみつけて思いたったと仄聞している。本会が創立されて三年めのことである。

その後第一高等学校の旅行部の

お知らせ

●第九回図書交換会

十月二十三日(土)午後二時より恒例の図書交換会を本会ルームで開催いたします。ふるってご参加ください。

毎回多くの会員諸氏からご協力をいただいてまいりましたが本年も、お手持ちの書籍・雑誌等でご不用のもの、交換ご希望のものがありましたら、一冊でも結構ですから、ご出品ください。出品締切りは、十月十日(火)といたします。なお、交換会への参加は、会員に限らせていただきます。

（図書委員会）

●山の文献展示会

十一月八日～十三日、東京国立国会図書館六階講堂でおこなわれます。詳細は次号で。

創立に参画、大正年代の早期に上州の白砂山、武尊山等に登山者としては初めてと思われる登山を行ない、これを『山岳』に発表しておられる。またその頃北アルプスの剣岳にのぼり並みなみならぬ登山への意欲を燃やされたようである。

大正十年の夏、パリの日本大使館在勤中モンブランに登頂されたことは既によく知られていることであるが、これは日本人がモンブランの頂上に残した最初の足跡であるといわれている。

大正十六年フランス山岳会の会員となり、爾来ピレネー、ベルナーオーバーランド等の地域に親しまれた。

その後昭和十八年特命全権大使として中央アジアを経てローマに赴任されドロミテの山々に遊ばれた。このように戦前は海外生活が長く、日本山岳会の世話を直接みる機会がなかったが、昭和二十一年三月に帰国されてからは評議員となり、二十八年に理事、三十三年には第九代の会長に選任され、四十年には名誉会員に推せんされている。昭和三十九年十二月、日本ネパール協会を創立、亡くなられるときまで会長であった。

その間、マナスルを始めエヴェレスト、最近ではナンダ・デヴィ、カメット隊等の登山隊の送り出しについて、いつも我が事のように寝食を忘れて奔走貢献されたことは記憶に新しい。

いっぽう、会のいろいろな集会にも、実によく出席され、ひろく老若の会員に親しまれていた。また晩年まで会の山行計画などに参加され御自身の体力に見合う山登りを楽しむことを忘れられなかった。

日高さんより年長の会員はまだ何人か健在であるが、会員として在籍年数六十八年は日高さんをおいて他におられないのではないかと思う。

（織内信彦）

＊前号4頁で日高信六郎氏追悼会の日時が六月二十二日となっていましたが、七月二十二日の誤りですので訂正します。

会員通信・集会報告

アメリカの小島烏水

近藤信行

＊小島烏水の緻密な研究をつづけている会員の近藤信行氏は、滞米中の烏水について調査のためこの夏渡米しました。これは島田巽氏宛の来信を諒承を得て再録したものです。

お元気でお過しのことと存じ上げます。このたびの小島烏水滞米中の事蹟取材のために、かずかずの御便宜をおはかり下さり、ほんとうにありがとうございました。こころから御礼申しあげます。

七月二十九日は、ノースウェスト便にてシアトルを経由してサンフランシスコに入りました。夏とはいえ、当地は肌寒いほどで、コートを着ている人がめだちます。マーク・トウェインの「サンフランシスコの夏はもっとも寒い夏だった」という言葉をおもいうかべましたが、夜ともなると街なかにミンクの外套がかろやかに歩きはじめるのにはおどろきました。

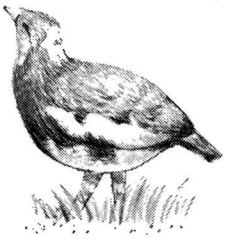
翌三十日からさっそく取材にとりかかりました。California First Bank（加州東銀）では津山頭取は東京御出張のこととてお目にかかれませんでしたが、早川副頭取、岡省三資料室長の御協力をいただいて、きわめて能率的に動きはじめることができました。また大森久雄君から紹介された日本航空の小原静爾さんが、まえもって小生の来桑の意図を関係者に吹聴しておいてくれたらしく、いたるところで烏水さんの名が出てきたのには恐縮しました。そのため当時の烏水さんを知っている方々にもお目にかかることが出来た次第です。しかしロスアンゼルス加州東銀から「小島チョウスイとはなにものか」という問合せがあったそうで、早川さんと大笑いしました。幸いなことに、岡さん（サンフランシスコ生まれで、東京外語に学んだ方、『祖国を敵として』の著者岡繁樹氏の甥、黒岩涙香の縁戚にあたる方です）は、加州東銀の本店にあって、日本人資料の蒐集にあたりはじめたとのことで、小生の仕事にたいへん興味をもって下さっております。こんなことから万事好都合にはこんでおりまして、東京銀行会長原純夫氏に御紹介いただきましたことはありがたいことでした。

Taylor and O'Farrell のホテル・カリフォルニアンに四泊、取材の便を考えて、昨日ジャパン・センターのそばのキョウト・インに移りました。この五日間で、すこしずつ取材の目途がたちはじめました。烏水さんの横浜正金サンフランシスコ支店長としての社会的生活とその背景、その趣味的生活、その山岳人としての生活、この三つの面から伝記的事実を蒐集しておりますが、まず「新世界」紙の所在をつきとめ得たことは、烏水年譜の修正とあらたな発見につながるようにおもえました。この新聞は日本人好きの Miss Watson というおばあさんが保管しておいてくれたので散佚せずにすんだとのことです。ほかの基礎資料はまだみつかっておりませんが、多くは火災で焼失したり、戦争中接収されたりしてなくなっているとのことです。しかし小生としては、望みを捨てたわけではありません。アメリカにおける日本研究の発達をおもうと、まだどこかにあるのではないか、などと考えています。したがって大学図書館やシティ・ホールにあたってみるつもりでおります。ただ残念なことに時間がそれを許すか、どうか、それが心配です。

昨日から北米毎日に通いはじめ「新世界」を調べることになりました。烏水さんがはじめてアメリカの土をふんだのは、大正四年七月二十六日（覆刻版解題書に、友人にあてた烏水さんの挨拶文を紹介しましたが、その葉書の記述は正確でした）のことで、来桑人物のなかに彼は写真入りで紹介されています。山には強いが海には弱かったという談話とともに。この時点から烏水さんのアメリカ生活がはじまるわけですが、一例をあげますと、ロスアンゼルスからサンフランシスコ支店長として着任したのは大正八年七月であること

を確認しました。（この年の四月十日出帆の春洋丸でいったん日本に帰り、七月十六日桑港にもどっています）七月二十五日、フェアモント・ホテルで新旧交替の歓送迎会がひらかれたとあります。当時、日本人実業界御三家の筆頭であった正金銀行の長であったことは、いろいろな面にかかわりがあったことと思われます。もちろん「文庫」時代や初期山岳会時代のやんちゃ坊主的な面影はありませんが、加州における日本人排斥問題について発言していることはおもしろいとおもいました。第一次大戦後の対独平和条約締結のあとに着任したので、ひとつの時代のはじまりを烏水さんはみていたのでしょうか。このころ、日本人移民の〝写真結婚〟が白人に恐怖をあたえたらしく、カンカンガクガクの議論が紙上で展開されています。排日の急先鋒であった「エグザミナー」紙を調べればもっとおもしろくなるかもしれません。（例のパトリシア嬢はエグザミナー社主の娘だったように記憶しておりますが、なにかの因縁があるのでしょうか。）

こんなことからぽつぽつと伝記的事実とその背景をあつめ、また関係者に会って往時の話をきいております。昨晩、バークレイに住む下村利長夫妻とポスト街に住む三原時信夫妻がわざわざホテルまで出むいてきて下さいました。下村さんは三田幸夫さんと小学校の同窓、Y校で飯岡幸吉さんと同窓の方。三原秀子夫人は烏水夫人の姪、その御主人は元「新世界」の編集長でした。関東大震災のあと、サンフランシスコの烏水宅に寄食したという縁で、こちらに永住することになってしまった方たち（下村氏と三原夫人）ですが、故国へもどった烏水さんとは別の運命をたどったことをおもうと、ひとしお感慨ふかいものがありました。四人の方々は第二次大戦をこで生きぬき、収容所生活も経験し、戦後は病中の烏水さんに物質的援助をしていました。自分たちの苦しみの半世紀をあらわにされませんでしたけれど、お話をうかがっていてよくわかりました。烏水さんの手紙十数通を貸して下さいましたが、とくに三原時信さんは盲目で、杖をひいてきて下さったのです。みなさん、烏水さんの話が出来てうれしかったと言って帰っていかれました。



まえに「文庫」時代を書きましたとき、滝沢秋暁と烏水さんとの交友という視点から、日本の興亡とともに歩んだ二人の運命をおもわずにはいられなかったのですが、烏水さんをとりまく多くの人人を考えるとき、あらためてそのことを思わずにはいられません。烏水さんの全体像をどこまでつかみ得るか、これが小生にあたえられた課題なのかもしれませんが、そのためにはできるだけ原資料にあたることを念願としております。この点、vraisemblable なものは vrais とはみとめないというデカルト主義者でありたいとおもいます。

当地へきてまだ一週間にもなりませんが、どんなことになるか。今回の旅行には、取材道具と山道具をもってきましたので、許された時間内で、烏水さんの足跡を追ってみたいとおもいます。八月九日、ロスアンゼルスにおもむき、Mrs. Yoko Mullen 宅に滞在、八月十九日、シアトルにはいって Mr. Griffith Way のところへまいります。そして九月十日ごろサンフランシスコにもどる予定であります。

日本山岳会諸兄姉のお力ぞえをいただいて、感謝に堪えません。

末文ながら御健勝を祈り上げます。皆さまによろしくお伝え下さいますよう。いずれまた後便にて。

八月四日朝　　近藤信行

島田　巽様

パミール登山報告

パミール登山隊出発まで

パミール登山隊事務局　伊藤行人

高所登山委員会が主催したパミール登山隊は、七月十四日全隊員モスクワに集合し、十七日には全員無事にベースキャンプ入りしました。登山隊出発までは山岳会の皆様から御協力いただきましてありがとうございました。登山隊の出発までのいきさつを事務局より報告します。

国際キャンプ

ソ連山岳連盟が主催する国際キャンプはパミール、コーカサスで一九七四年から毎年開かれている。日本からは七四年のパミールキャンプに新潟・大阪外語大合同隊が参加してレーニン峰（七一三四米）に登頂しているし、七五年のコーカサスキャンプには新潟大隊が参加している。

各コースごとに決められた料金を米ドルで払い込むとモスクワ集合から解散までの滞在費、食費、交通費、医療費のすべてのめんど

●図書紹介

A Photographie of the Mount Jomo Lungma Scientific Expedition (1966—1968)

中国隊の北方ルートによるエベレスト第二登に先立ち、表題のような見事な写真集が発表された。原書は中国語だが、これはその英語版である。編集は Scientific Expedition of the Chinese Academy of Sciences となっている。中国隊は一九六〇年五月第一次の北方ルートからのエベレスト登頂以来、ロンブック周辺で、エベレストを中心とした大々的な科学調査隊を毎年派遣し、登山だけでなく、広く科学的な調査を行なっていた。本書はその成果の一端であろう。

エベレスト登山についてはものたりないが、地質、動植物、鉱物など多方面の研究の進展がよくわかる。こうしたことは、中国隊以外のエベレスト隊ではまったく行なわれていなかったものだけに、学術的にも貴重なものであろう。エベレスト関係の文献として欠かせないものであろう。

一九七四年七月　北京科学出版社発行　（山崎安治）

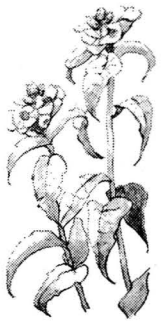
うをソ連側がみるシステムである。登山期間中は食料、燃料を支給してくれる。こうして獲得された外貨がソ連のエベレスト登山などの資金になるそうである。

登山計画と隊員募集

昨年の十一月にソ連山岳連盟から今年度の国際キャンプの日程、コース、料金などについてのインフォメーションレターが田村俊介氏に届いた。田村氏からはすでに昨年の六月に次の国際キャンプには日本山岳会隊として参加しようという提案があり、高所登山委員会ではソ連からの正式な計画発表を待っていた所であった。この通知に基いて高所登山委員会は会報「山」を通じて隊員の募集を行なった。登山対象は今回から初めて開放されたコミュニズム峰（七四九五米）西面で、期間は七月十四日～八月十七日（モスクワ集合～開散）である。募集の結果、東京、新潟、名古屋、大阪から十五名の参加者があり、更に医師一名と写真家の白籏史朗氏、朝日新聞特派員を加えた十八名の隊となった。隊長は高所登山委員会理事の原真氏である。

準備山行と低圧実験

この登山は、ソ連国内での仕事はソ連側がすべてやってくれて遠征準備が手軽な半面、実質二十日あまりで七五〇〇メートル峰を五～六級のルートから登らなくてはならないという難かしい課題があり、効果的な高所順化が強く要求されている。このため国内での高所順化トレーニングとして、準備山行と低圧実験とを計画的に組み合わせて行なった。準備山行は全国にまたがった隊員間の交流の意味もあって、立山、富士山、御在所で行なわれた。低圧実験は名古屋大学環境医学研究所の協力でのべ九日間にわたって行なわれた。六月の初旬に行なわれた御在所の集会で最終的な隊員、分担、装備内容などが決められ、名古屋地区の隊員が物資の集積、梱包、輸送を行なった。



日程変更

準備は順調に進んでいたが、六月に入って突然ソ連側から日程を四日程遅らすと伝えてきた。だが旅行社は一年中で最も混むこの時期に飛行機の予約日を変更するのは難かしいという。予約日を変更できなければ休暇の期限にひっかかる隊員もでてきたし、旅行シーズン中のモスクワは高いホテルしかあいていないので、予約日が変更できずに出発すれば滞在費も馬鹿にならない額になりそうであった。隊員の中にどうなるのかという不安が生まれたが、隊長自ら旅行社に出かけての交渉で出発に関しては変更に合わせて予約をとることができた。帰国に関しては不確定であったが、田村氏のアドバイスもあってソ連へ電報を打った。「突然の日程変更で帰りの飛行機の予約がとれない。そちらでとるか滞在費を負担するかしてくれ」ソ連からの返事はなかったが出発直前に心配されていたビザがおりた。モスクワでの直接交渉で事態を収拾するということで帰国の日は未定のまま全員日本を発った。七月十日三名が先発し、十四日残った十五名が羽田を出発した。

メンバー

隊長　原真　副隊長　神崎忠男　鶴田倍弘　隊員　阿部俊郎、池沼慧、上島康嗣、小川繁、上郡修、木村孝保、篠沢講、田中静哉、永田良治、前田猪佐雄、松井宝一、宮下増男　医師　浅野俊樹　写真　白籏史朗　報道　近田静正

パミールの山麓から

原　真

〈一九七六・七・一六　モスクワにて・田村俊介氏宛〉

羽田にわざわざ見送ってくれてありがとうございました。あなたがもらしていたように「今回のパミール計画はとんとんびょうし」に運びました。ちょうど一年前に二人で相談した通りに計画は実現しました。予定通りにゆかなかった点はあなたが参加出来なかったことだけです。そのことをいくらか不安に感じましたが、モスクワへ着いてみてほぼ順調に事が進んでいることが確認出来てひと安心しているところです。

空港では二人のロシヤ人が出迎えてくれました。日本語をしゃべれる人が来るのを期待していましたが、それはきませんでした。でも英語で充分に事は足りました。ロシヤホテルにおさまりました。64ベッドもあるという大ホテルで赤の広場のすぐ近くにあります。御存知のことでしょう。

ソ連式のやり方には何かとめんくらい、とまどいも感じましたがすぐ慣れました。ソ連というとんでもない巨大組織のなかでは、すべてがいささか杓子定規に思え、不便不安の感情が隊員一般に最初のうち、というより到着第一日に見られました。しかし一日すぎれば、ちゃんと相手方の受け入れ態制がしっかり出来ていることがわかり、ビザや帰りの予定のことまでわかってくれていることも確認出来て、まかせておけばよいことがはっきりしました。私もあなたの助言にしたがって、こちらの要求事項を端的に相手方に言ってお

売場ご案内

最新入荷の本

✠山の文芸誌ベルク第12号300円　✠ヒマラヤをめざした越中人たち（橋本　広）1,600円
✠越後の山旅・上巻（藤島　玄）1,500円
✠会津の峠・上下（会津史学会）各1,300円
✠森林・草原・水河第二版（加藤泰安）2,500円
✠遠い山　近い山第二版（望月達夫）1,500円

特製本在庫ご案内

✠坂本直行画文集　雪原の足あと原画花の絵（淡彩２号）付　25,000円
✠南会津山の会編　いろりばた　8,500円
（上記限定本の在庫があります。お求めは直接茗渓堂お茶の水店へ）

茗渓堂　〈山の本の売場〉お茶の水店三階
営業時間平日・午前10時30分より午後8時
日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分

きました。少し時間はかかるが、ちゃんとした返事がもどってきて、問題の解決も出来てゆくことがわかりました。

日程では予告されたものより少しの狂いが生じているようです。例えば我々はモスクワへ一泊すると知らされていたのに、二泊することになったし、パミールからモスクワへ帰るのが八月一七日のはずだったのが、どうも八月一五日らしいといった変更です。

食堂ではギリシャ、チェコスロバキヤの連中に会いました。多分彼らといっしょにオーシへ飛ぶことになるらしい。

さっそく赤の広場を見物しました。非日本的な壮大さを感じます。いかめしいレーニン廟を見ているとこれは一種の宗教だなと直感します。ロシヤ人の鈍重と日本人の軽薄といった比較が心にうかびます。

広大な国土と大森林。これがソ連の第一印象です。モスクワの自然環境もすばらしい。ちょうどアカシヤが散りはじめています。空気もきれいだし、ゴミもない。公害に順応した日本人は、こういう街へくると、たちまち異和感におそわれるものらしい。オデン屋もラーメン屋もバーもキャバレーもない。しかし加藤九祚氏（ホテルへ訪ねてこられた）の言葉をかりれば「日本がみならうべき点もたくさんあるよ」ということになるらしい。

ロシヤ人は公的には無愛想だが個人的にはなかなか親切で、プロレタリアートとは心理的にはつまり農奴の変形したものであると実感しました。

御推せんいただいたロシヤ関係の本からつぎの四冊を持ってきました。

ロシア・ソヴェト史
ネオル・コーチャン
ロシア革命五十年
I・ドイッチャー
猟人日記　ツルゲーネフ
死の家の記録
ドストエフスキー

飛行機の中でまず革命から読みはじめました。けしからん付け焼刃の読書です。「猟人日記」が最も鮮明なロシヤの第一印象でした。ドストエフスキーはまだ読んでいません。

本日（7月16日）夕方8時にオーシへ飛びます。その時刻のモスクワはまだ明るいので、夕方という言葉がふさわしいです。3時には夜が明けて、目が覚めて眠れないといっている隊員もいます。気温は20度前後。少し肌さむい。空気はよくかんそうしていて、私のこのみにぴったりです。

〈一九七六・七・一九〉

いまレーニン峰のふもとにいます。今日の午後、8人の隊員と全隊荷がヘリコプターでフォルタン

本会の会員章（バッジ）についてはさきに松田雄一君が『会報』二四七号（一九六六年一月号）に、『山岳』四年二号、同十四年一号及び二号等の関係記事を調べて、解り易く説明されているが、初期の会員章が制定されたのは明治四十二年（一九〇九）六月一日であった。当時は希望する会員に実費（金壱円）で頒付したものだが、その時次に掲げるような書類を交付したことが、武田久吉氏旧蔵の資料からこの程判明したので参考に供したい。

……

（簿）第十號
日本山岳會會員章　壹
裏面記入番號第壹號
右御送附申上候間左記件々御了承相成度候也
一、本章ハ本會ノ代表的記標ナルヲ以テ本章所持者ハ、特ニ會ノ體面ヲ重ゼラレ行動ニ注意セラレタキ事。
一、本章裏面記載ノ番號ハ姓名ト共ニ本會ニ登記シアレバ、他人ニ讓與又ハ、貸預等セラレザル事。
一、本章ヲ紛失又ハ、破損セラレタル時ハ直ニ、其旨通知セラレタキ事。
一、本章ハ中央空位ノ着色ニヨリテ、會員別ヲ示セリ。
名譽會員。赤色ニシテ中央ノ雪輪ハ金色。
特別會員。赤色ニシテ中央ノ雪輪ハ銀色。
正會員。橄欖色ニシテ中央ノ雪輪ハ銀色。
役員。紫色ニシテ中央ノ雪輪ハ銀色。
明治四十貳年七月拾貳日
日本山岳會
河田　黙　殿

……

以上の通りで、旧会員章の第壱号が発起人の一人であった河田黙氏に交付されたことをも示している。用紙は上質の日本紙に朱色の罫、中央〈三センチ〉のかなり大型の角印が押捺され、左下隅に「日本山岳会幹事高野鷹蔵」という横縦約二センチの角印が押されている。なお用紙の大きさは縦二四・二センチ、横三三・三センチである。

会員章覚え書

制定当時の会員章は希望者にのみわけたもので、正章の他に小型のネクタイピン式のものもあった。

大正九年（一九二〇）四月一日、現行と同じデザインの会員章を新たに制定した際、入会年月順に会員章番号を定め、旧会員章と引換えに、あるいは旧会員章を所持していない会員には新たに、新会員章を貸与することとなった。その際、河田氏は第七号と決定され、引換えられた旧会員章と右の交付書とが、会に返納されたものと想像される。それが偶々武田さんの旧蔵品中に見出されたという訳である。旧会員章第一号と右の交付書は、会にとって極めて貴重なものと考えられるから、大切に保管永蔵して頂きたい。

なお旧会員章は当初の形を小さくして現在略章として使用されていることは周知の通りである。また現行の細則によれば、会員章は入会時に交付するとあり、退会に際しては返納することとなっている。また会員章の裏面にきざまれた番号は、会員章番号を意味するばかりでなく、会員番号として永久に登録されることとなった。これは昭和四十年（一九六五）、本会創立六十周年にあたり永年会員制を発足させるに際し確立されたことであって、当時それに関係された松田君が旧事をよく調べられた経緯については、前記の一文に尽くされているので、ここには省略する。

（望月達夫）

ベック氷河（コミュニズム峰）へ飛びたちました。私を含めた10人が残りました。明早朝には残る隊員も飛べるようです。

モスクワで2泊したあと、オーシへ飛びました。5時間ほどで着き、ごうせいな朝めしをふるまわれました。くだものがたくさん出されたのに感激。新聞のインタビューなども受けました。すぐに25人乗り小型ジェット機に乗りかえジ・アライ山脈を飛び越えてアライ谷に着陸。ここからアライ谷すなわちパミール高原をトラックにゆられること3時間、レーニン峰のふもとにある登山基地に到着しました。快適に整備された基地の様子におどろきました。出発前、いろいろ質問をしてあなたを困らせましたが、すべて杞憂でした。

ベースキャンプの隊員用テントはゆったりした2人用で、二重構造の立派なものです。広い前室があって居住性はよい、厚さ5センチのマットも敷いてある。オーストリア、ベルギー、西独、東独、ギリシャ、アメリカ、フランス、ポーランド、スイス、チェコなどの旗がすでにはためいており、さっそく日の丸もあげました。下にJAC旗もかかげました。基地には10個ばかりの建物があり、食堂、会議室、便所、シャワールームなどです。今年は一四〇人くらい来ているらしい。

我々が着いてすぐ開会式がありました。おえら方のあいさつのあと土地のアコーデオンと弦楽器の伴奏入りで歌を披露してくれました。この辺の住民はモンゴル系の顔だちですが、これをダッタン人というのでしょうか。

パミール山群もヒマラヤの一角であるという立場をとるとき、アライ谷から眺めた山脈の印象はカラコルムよりややなだらかでやさしい感じを受けました。雪が多く岩の露出度は少ないと思えました。レーニン峰のふもとまでトラックで入ってこられるといった谷の構造ものびやかでアルペン的です。

到着の翌日、さっそくレーニン峰の探検家の峠（四〇五〇メートル）まで登ってきました。ガレ場の状態も比較的歩きやすい。草地がどこまでも延びていて、カラコルムの谷のような、とんでもない荒々しさはないようです。あるいはネパールのように日本的なやせ尾根が次々にあらわれることもないようです。こうした第一印象がパミールのすべてにあてはまることはないかもしれませんが、いまのところパミールはやさしく我が隊を受け入れてくれています。

我々の係になったのは、モスクワ大学経済学部の学生でポールといいます。希望してここへ来たそうですが登山家ではありません。

我々はただ相手にまかせて待っていれば着々とことは運んでゆくらしい。この点がネパールやカラコルムとは根本的にちがうところで、他の地域だったら入山2日目には我々は心身ともに疲労の極に達しているはずです。モスクワではもっぱら市内見物をしていればよかったし、山へはいればさっそくあちこちの山を歩きまわることが出来た。これがもしカトマンズやピンディーなら、着く早々に登山局を訪ねて、いろいろな折衝が待っているでしょうし、山へ入ればたちまちポーターとのやりとりで際限もない時間を費やすことになります。つまりソ連は立派な文明国である。

キャラバンを楽しむという考えがある訳ですが、それは多分ひとむかし前の話であって、いまではネパールでもパキスタンでも、ポーター賃もうなぎのぼりだし、入山事情もこみいってきて、楽しむ状態からは遊離しはじめていることはご存知のとおりです。ここでソ連の受入れ方式というのが新しいヒマラヤ登山の動向として一考の値打ちはあると思いました。ヒマラヤからシプトンやティルマンのよき時代は去ったのです。我々が彼らの真似をしようとしても、せっかちさが先にたち、みすぼらしさの方が目立ちます。日本の実情でいえば、あなたも海外委員をやっている日山協の雰囲気です。ただでさえわずらわしいヒマラヤ登山を、さらにわずらわしくしている不必要悪です。けっして必要悪ですらありません。

私の考えでは、ヒマラヤ事情は数年のあいだに大きく変動するでしょう。その方向は、あえて一般化すればソ連方式に各国とも近づくということです。いまのところ各国とも、多すぎる登山隊をうまく制御出来なくて混乱していますが、うまくとりしきろうとすればソ連方式に近づかざるを得ないのではないでしょうか。少なくとも日本山岳会では、こうした動向を先取りして能率のいい登山隊派遣の体制をつくるべきではないかと思います。海外登山委員会などはヒマラヤ一般（それ以外の地域についても）に対して登山隊を派遣するための有効な実践指導に着手すべきです。いまのところ、ウジ虫的な炉辺閑話主義者のために、もはや登山家のクラブなどとはお世辞にも言えないところまで堕ちてしまったわが山岳会のことを遠くパミールの一角から考えている次第です。

この基地の高さは三六〇〇メートルです。隊員には多少高度の影響が出ています。順応を早めるためにたえざる運動と過呼吸の訓練をさせています。昨日は四四〇〇メートルまで全員で登りました。今日は先発8名を神崎君に托して三九〇〇メートルのフォルタンベック氷河へ送りました。明日からはコミュニズム峰の偵察が始まるでしょう。フォルタンベック側からは一般ルートと六級ルートの二つがあります。もちろん六級の方も試みるつもりです。持ち時間15日でこれが出来るかどうか面白い実験です。私は明朝飛びます。

上高地での自然保護委員会

武田満子

上高地の山岳研究所で、7月10日、11日に自然保護委員会を行った。

はじめて各支部に呼びかけて、出席を依頼して集っていただいたが、現地の環境庁の羽賀さん、藤岡さん、松本営林署の遠山さん、安曇村の宮本さん（上高地を美しくする会）が出席された他、中原先生、甲府の山村さんなどもまじえて、東京の委員9名と合せて35名のにぎやかな委員会となった。

自然保護委員会は、51年度の活

動方針としてゴミの問題に焦点をあてて、当面は岳沢をクリーンエリアとしてとりあげ、会員の自然保護思想の啓蒙をはかっていこうということになっている。

「山をきれいに、ゴミは持ちかえろう」というスローガンの下に、全会員に模範になってもらおうということである。そこで、各支部に自然保護委員を置いていただき、来年度からは自然保護委員長が任命の形をとり、各地の情報を交換し、自然保護に関する資料を互いに紹介してそれぞれ密接な連絡をとっていきたいということでこの委員会が召集された。また、環境庁の自然保護委員の腕章になぞらえて、ライトブルーの地に白抜きの文字を入れた腕章を、会員の約一割に当る三五〇枚作る予定となっている他、「ゴミを持ちかえろう」という文字を入れた標柱を立てる計画、自然保護憲章から適当な文句を選んで自然石に彫ったものを場所を選んで設置したい計画などが披露された。クリーンエリアとして設定した岳沢は機会あるごとに実態調査を行いたい意向である。山岳研究所を利用される方々にも御協力いただきたく、よろしくお願いいたします。

＊

会議の終りには委員長の渡辺さんが「穂高宣言」を読み上げた。

上高地は、まだシーズンのはじめであることや、環境庁の管理がきびしいせいかわりあいにきれいに整備されている。全国にはいろいろな自然保護活動の会があるようだが、安曇村に事務局を置く「上高地を美しくする会」が、ビニール袋にゴミ集積所を印刷したものを各山小屋で登山者に配布して、そこまでゴミを持っていってもらうようにして効果を上げている。ゴミ集積所は各山小屋などになっている。その中間には、かえって汚される傾向にあるため、ゴミ篭は置かない環境庁の方針である。この会は本年度は国、県の補助金をもらって一千万円余りの予算を自然保護の活動にあてている。

集った方々に各地での活動状況を話していただいたが、それぞれの立場においていろいろ工夫を重ねながら地道に活躍しておられることがわかった。海外の登山計画に熱心でも自然保護に関心のある若い人は少ないが、大阪では、毎年子供達を二百人余り引率してキャンプを行い、それを通してキャンプのマナーと自然保護の精神を教えておられるとうかがった。たとえば、大台ケ原ではキャンパーのマナーが悪いことを理由にキャンプ禁止になってしまったという。登山者のマナーが悪いと、年毎にキャンプの指定地はせばめられる。石川県、新潟県でも有志が今までにゴミの問題ととりくんでおられる。上高地のマイカー規制も大変効果があったという。ごく当り前のことが行われないこれらの問題は教育の問題であると意見が一致した。

自然保護憲章にも「自然保護についての教育は、幼いころからはじめ、家庭、学校、社会それぞれにおいて、自然についての認識と愛情の育成につとめ、自然保護の精神が身についた習性となるまで、徹底をはかるべきである」と書かれている。

山へ入るときにはゴミとなるようなもの、山を汚すようなものは持ち込まないことである。このことは荷物の軽量化への工夫にもつながる。マッキンレーでは日本のゴミが二トンもたまって困っていると日本山岳会へ注意の手紙が届いているという。海外の登山でも気をつけたいものである。

＊

日本山岳会としては尾瀬沼の電源開発反対をはじめとして、富士山のケーブルカー反対、西穂のケーブルカー反対、屋久杉を守ろうという運動、大雪山の縦貫道路反対、連峰スカイライン反対、60周年に自然保護の講演会主催などを行ってきている。これからも自然破壊が予測される計画には反対していく方針であり、現地調査も行いたい方針である。景観道路工学について永年研究を重ねておられる中原先生から、山に道をつけるとき破壊の少ない方法を選ぶにはどうするかという問題も委員会でとりあげてほしいと要望があった。先生は、コンクリートをふきつけた方法の研究などを通しても自然保護活動をしておられる由である。

11日には早くから岳沢小屋まで登り、この地域の実態調査を行った。夏山ルートは比較的汚れが少なかった。しかし、春山のテント場に当るガレのあちらこちらにゴミの山が残されていて、残念ながら本格的な登山者に対する自然保護思想の啓蒙が必要なことを痛感した。一同は、岳沢小屋で空カン処理を手伝った上、帰りにビニールの袋にゴミを集めながら降りてきた。

出席者

（自然保護委員）渡辺公平、山本良三、村井米子、大野俊夫、宇野佐、武田満子、内村鉄次郎、児玉茂、池田智津子。（宮城）庄司駒男。（福島）武藤清次。（岐阜）大内幸雄。（関西）出口一良。（静岡）坂下心一。（越後）猪俣信市。（石川）亀田与三次、力丸茂徳。（信濃）奥原教永、井口謙司、浅輪幸久、西牧康。（東海）尾上昇、中世古隆司。中原万次郎、山崎安治、田村聡明、山村正光、望月英美、宇野恭子。（環境庁）羽賀克己、藤岡。（松本営林署）遠山鎮彰。（安曇村役場）宮本肇。（岳沢小屋）上条岳人。（東京医大上高地診療所長）関口令安。

●お願いとお知らせ

＊会費の納入について

また同じお願いで恐縮ですが、今年度の会費をまだ納入されていない方は至急納入ください。

＊上高地山岳研究所の利用を

九月、十月ともたっぷり余裕があります。会員はもちろん、非会員の方でも利用できますから、上高地周辺の秋の散策と登山のベースにご活用ください。

＊本誌への投稿をお待ちします

「山」ではみなさんからの原稿をお待ちしています。随筆、紀行、研究、報告等、山に関係のあることならなんでも結構です。なお、レポート用紙などをお使いになる方がありますが、かならず原稿用紙（なるべく15字づめ）をご使用ください。

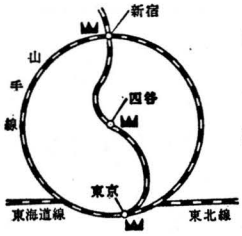
＊前号ナンダ・デヴィ報告のうちインド側隊員のザンブゥエは、ザンブゥIの誤りにつき訂正。

＊本号校了の九月九日、名誉会員藤島敏男氏が逝くなられました。謹んでご冥福をお祈りします。

昭和五十一年九月二十日発行
113 東京都文京区湯島一―六―一
利根川商事㈱さくらビル
発行所　社団法人　日本山岳会
発行者　今西錦司
編集代表　大森久雄
（813）二二八六（代表）
振替口座東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂

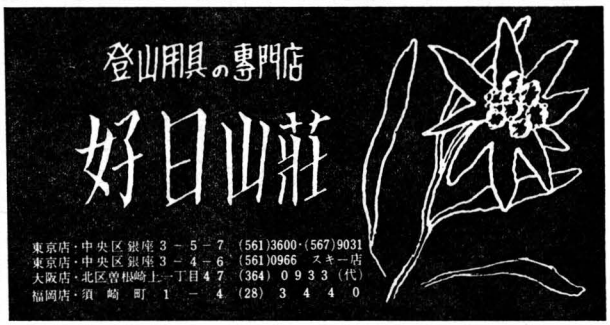
登山・スキー用具専門店
山の店
大阪市北区梅ケ枝町101
TEL. 06(362)5736
●買い易い 山の店
●北へ来たら 山の店
●フレッシュな 山の店

山とスキーの専門店
片桐
東京都文京区湯島3丁目38－9
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



四谷店　東京都新宿区三栄町三番地 TEL (351) 7432・1912
八重洲口店　東京都中央区八重洲二の五 TEL (271) 1560・8575
新宿店　新宿ステーションビル四階 サービスショップ TEL (352) 6564
日本信販加盟店
山友社 たかはし

登山とスキー具
イワタ
東京都中央区日本橋通2－1
PHON; 271—7686・1718



山の本

森林・草原・氷河　第二版

加藤泰安—〈A五判四八二頁〉定価二、五〇〇円
未知の領域が既知となると、さらにその先に未知をひろげる。大興安嶺、蒙古、ヒマラヤ、ニューギニア高地。更に捲くことなく内奥アジアを夢見ている近代登山家の、四十年近くにわたる探検と登山の記録的な叙述である。

山に忘れたパイプ　第二版

藤島敏男—〈菊判五八〇頁〉定価三、二〇〇円
著者のよき時代の静かだった山旅から、現在までの山登りの紀行を中心に、随想、書評、書信などを収録。とくに著者自ら纏めた登山譜には半世紀をゆうに越える個性的な山の歴史が克明に記録されている類稀れなものである。

遠い山 近い山　第二版

望月達夫—〈B六判三〇四頁〉定価一、五〇〇円
著者は、俗受けしない、人っけのすくない、ひっそりとした山や峠の遍歴が、いかに楽しいかを、かざり気のすくない文を通じて炉辺閑話のような気易さで、山仲間に淡々と語っている。耳をかたむけて聴こうではないか！

山・人・本

島田　巽—〈A五判三七四頁〉定価二、四〇〇円
山がとりもつ種々の書物とのめぐり会い。その本を通しての心暖まる人との交わり。書名になった『山・人・本』は今回新しく書き下したもので、ながい年月、本に親しんできた著者ならではの興趣深いものである。

山は満員

渡辺公平—〈A五判三六〇頁〉定価二、二〇〇円
これは楽しい山歩きの紀行集であるが、著者のキャリアのある眼は随所に豊かな自然とのふれあいを見出しているし、また親しみのある文章で登山史上のエピソードを語り、自然破壊に対しては鋭い批判を投げかけている。

●出版目録送呈
●お買上、ご注文は最寄り書店でどうぞ！　茗溪堂　〒101 東京都千代田区神田駿河台2の1　電話03-291-9442 振替東京8-24723

日本山岳会七十周年
越後支部　三十周年

苗場山　記念山行

梅雨を迎えた越後の空は雨雲が低く垂れ下がり、山々は煙雨にむせて長く尾を引いている。

記念山行と日時は、創立総会開催の一等三角点の山苗場山、六月十九日と早くから決定しておき、当日の晴雨はお楽しみの賭とし、三コースを準備しておいた。

旅館、記念品、輸送、案内通知と進めるうちに、残雪は消え新緑が鮮かになって当日となる。

東京と新潟の中央が湯桧曽駅、それより清水隧道を抜けた越後湯沢駅富士屋旅館が今日の会場だ。

定刻二時間前から関西、関東、駿河と諸先輩、旧知がぞくぞくとご来越で、準備完了しない受付は吃驚してすっかり失礼してしまった。

昭和五十一年度、越後支部通常総会は別室で定刻開催〝しない支部〟に会員も慣れたもの、異議なし拍手でバタバタと終了。

一方受付では本部の池田嬢のお愛嬌で、クラブタイ、タイピンはたちまち売切れ、予約に追われるさわぎ。支部係員は、赤い小物袋に藤島玄著『越後の山旅』上巻と緑の『苗場山記念山行資料』（「創立総会苗場日記」藤島玄、「苗場登山史の周辺」久保田全）、会員名簿、その他を詰めて、参会者に渡すのにおおわらわだ。

大広間に全員集合、斎藤平七司会で記念式典、支部長挨拶、支部創立より越後の山々の開発、地域研究、後輩の指導に功績顕著な在籍会員十七氏の功労表彰式だ。笠原藤七、金山淳二、横山雪男、赤沢清明、佐藤金一、佐藤一栄、小泉喜重、大山昭一、川崎堅太郎、佐久間淳一、花井馨、望月力、小早川又一、室崎佐喜男、五十嵐篤雄、鷲尾彦七郎、平田静一郎の各氏十七名に表彰額と金盃を贈呈、金山淳二氏が代表して受理、謝辞に次いで参会者から祝辞を頂戴する。

関西支部代表津田周二氏は「昨年関西支部四十周年記念行事に藤島支部長の出席があった。二十三年の団体登山以来のご交誼がある越後支部も三十周年を迎えて全くめでたい、今後益々のご発展ご活躍を祈る」と祝辞をいただく。

本部代表の近藤信行氏は「越後支部のたゆまぬ登山活動に敬意を表すると同時に、多数の会員の参会の場に諸先輩をさておいて祝辞をのべるのは恐縮であり、また光栄である。ますますの発展を期待する」と激励された。

支部を代表して金山淳二氏は、昭和十五年頃の日本山岳会学生部成立の経過から、高頭仁兵衛翁の越後の冬山についての懐古談にうつり、最後に笠原藤七氏の欠席が残念だと結ばれた。

藤島支部長が立ち、昭和二十一年の雪の暮に、高頭邸に発起人が参集、支部創立結成をしてから三十年、現在会員二二九名、創立当時からの会員一七名をあげた。

〝しない支部〟でも三十九年新潟国体で飯豊連峰に斎藤平七チーフのもとに全力を投入し、全国の岳人を迎えた。四十一年は県境六八七キロを点でなく線で結ぶべく、佐藤一栄リーダーのもとで一致団結し完遂し「越後山岳第六号」を出した。現在は越後並びに隣接国の一等三角点の調査報告を「越後山岳」七号に執筆中だ。

これらは総て良き会員の一致協力の賜と感謝する。支部の組織は全県下の隅々に浸透したが、三十年の流れに人は亡くなり、人は去り、人は来り、懐古の感無量なりと結んだ。

祝電、熊本支部、信濃支部ほか会員からの一四通を披露し式典は終る。一同の記念撮影は、柳沢、石川会員によって行なわれた。

懇親宴会は室賀輝男氏の司会によって開催、まず支部会員還暦者赤沢清明、長崎達男、斎藤平七、小野塚照治、小椋利雄氏の紹介、金盃の贈呈、斎藤氏が代表して謝辞、津田周二氏の発声で一同乾杯。酒は酔うためにある。一升瓶を単位に薬籠にわかして次々と徳利に配給。歌は婦人を喜ばせるためにある。正調佐渡おけさ、岩室甚句が出ると、会津衆の磐梯山が唄われた。みんなの喜びこれに過ぎたるはなしで飲み語りで、あっちこっちでごろごろ。

明けて二十日、底抜けの快晴、晴雨の賭に勝って悦ぶやら負けて悔むやら、宿酔を温泉に流して六時、二台のマイクロバスとマイカーを連ねて、苗場山記念山行に出発して行く。以後の行動は参加者の感想を別にいただくとして、一隊は頂上往復、一隊は別れて小松原湿原を通って逆巻温泉へ下山した。残留組は「北越雪譜」史跡めぐりにマイクロバスとマイカーで雲洞庵、八海山黒宮、鈴木牧之記念館とめぐり午後開散、遠路ご参会いただいた皆さん、支部会員の皆さん、ありがとうございました。

参会者氏名

二木信次、松本熊次郎、太田敬、津田周二、山本朋三郎、斎藤桂、近藤信行、沼倉寛次郎、小坂丞、鈴木林治、名児耶達男、山崎健、浜野正男、深田しげ子、鳥居亮、浜野泰子、岡部みち子、児玉茂、金坂一郎、池田智津子、小倉厚、網倉志朗、近藤智津子、滝口純、皆川寛一、宅間清子、穴田雪江、菅野弘章、小出久子、森婦紀子、滝口豊子、本庄克行、吉村比佐、栗原幸久、荒井謙之輔、唐橋宏、斎藤喜一、佐々木幸作、藤島玄、関野重政、大塚八千代、北村猛、藤井信、五十嵐恵美子、矢田目昇、徳長正、安孫子美智子、五十嵐克、佐竹信行、牧野牧夫、望月力、赤沢清明、山岸栄三郎、佐藤一栄、上村幹雄、小林智明、斎藤平七、井口正男、笹川和男、鈴木敏雄、本望英紀、猪俣信市、岡村憲、鈴木義男、田崎順郎、金山淳二、柳沢一男、室賀輝男、清野正二、石川勝恵、奥津五郎、石川三智子、大味精司、石坂一郎、佐藤高志、広沢伝一、五十嵐篤雄、加藤勝義、石田国夫、杉原八百樹、久保田全、松坂良一、藤井与嗣明、坂井厚、中村一雄、小早川又一、立川重衛、小泉喜重、横山雪男、酒井定勝、木村祐三、小野塚照治、富沢磐、曽根義一、小林兼一郎、土田幸雄、長崎達男、近藤ムツ、長沢洋輔、山本利彦、小口寿證、桑原悌治、中沢武彦、清水迪男、小野健、五十嵐義和、堀内捨己、半谷節男、山田一男、上原由美子、上田幸子、伊藤周左衛門（順不同、敬称略）

追記　記念写真は送共五〇〇円、苗場山資料は送共五〇円、希望者は越後支部へお申込みください。

鈴木敏雄

ルーム日誌（51・7）

2日（金）理事会
5日（月）山研委員会、集会委員会
7日（水）学生部気象講習会、自然保護委員会
12日（月）集会委員会
15日（木）カメット委員会
19日（月）集会委員会
20日（火）小集会第三三五回「カモシカ・ダウラⅣ峰」報告会
21日（水）三水会
22日（木）青年懇談会、日高信六郎氏追悼会（於国際文化会館）
26日（月）集会委員会
27日（火）自然保護委員会
今月の来室者三八五名

会員異動（51・7）

休会者
四三八一　安斉　正明（51・7・2）

除籍取消
五七四六　宮本　貞雄
六五三二　田中　潤一
一四九七　藤村　泰三

支部変更
七五七四　五十嵐　寛（その他）
七三七五　常盤　峻士（その他）
七二九七　稲場　靖邦（その他）
七五〇〇　羽賀　克己（その他）
五五六六　羽賀　育子（その他）
七四六六　羽賀　正（その他）
七六四七　佐藤　康（その他）

退会取消
四四四四　川島　礼一（50・7・10）

改名者
四三七五　橋本　祥案（51・7）

退会者
七七八六　野口　昌子（51・7・8）
六五五八　荒井荘二郎（51・7・9）
三七八六　鈴木　克己（51・3・31）

★　★　★

●お知らせ

第三四五回 現地小集会

期　日　十月二日（土）～十月三日（日）夜行日帰り
集合場所と時間　十月二日（土）二〇時三〇分　日本山岳会前
場　所　谷川岳
コース　天神尾根コース、西黒尾根コース、その他
費　用　天神尾根コース＝大人三〇〇〇円、小人二〇〇〇円
西黒尾根コース　大人二五〇〇円、小人一五〇〇円
申込み方法および詳細については事務室まで電話でお願いいたします。

学生部ガルワル・ヒマラヤ登山隊
―一九七六年秋季―

学生部は隊長牧野内昭武以下九名の登山隊を今秋、ガルワル・ヒマラヤの秀峰ドゥナギリ峰（七〇六六メートル）へ派遣します。
未熟で稚拙な登山隊ですが、未踏の北稜からの全員登頂を期しております。
会員諸氏のご指導・ご鞭撻よろしくお願いいたします。

（学生部委員長・千葉大学山岳部　加藤秀之）